

国内研修成果報告書

はじめに

私は今回の研修において、企画・運営のリーダーとして参加した。そのため、研修の内容や自分自身が感じたことなどに加えて、今回の研修の意義や、リーダーとして研修メンバー全体を見通した考えも報告する。そして、目的やそれに応じた成果を明確化することで、今後大切な被災地支援の「継続」のために活かしていきたい。

研修の背景

震災から4年を経過した被災地では、仮設住宅の集約化や復興公営住宅への移転が始まっている。これらは、4年間の中で形成された仮設住宅でのコミュニティの解体と再編成を伴うため、住民の不安感や疲労度も高い。そのため、集約や移転後もコミュニティを維持し続ける気力や、コミュニティ形成のためのノウハウの蓄積が必要である。

いまだに数えきれないほどある被災地の課題の中でも、私たちはこのコミュニティの問題に目をつけ、昨年8月の被災地訪問をきっかけにし、10月から本格的な活動を始めた。現在は「復興ボランティア団体スタ学」として、湯浅誠教授にご指導いただきながら、現代福祉学部の学生14人（1年生5人、2年生4人、3年生5人）で活動している。

研修の目的

今回の研修では、1泊2日の岩手県釜石市での滞在、そこでの交流イベントの実施、そしてイベント実施に向けた東京での準備を通して、次のようなことを目的とした。

- ①スタ学の団員が被災地（特に釜石市）の現状を理解し、被災者の方々のために自分たちにできることを考える。
- ②イベントのアイデア出しをする中で、仮設住宅の住民の方々に楽しんでいただくための方法を考える。そして、実現に向けて具体化・実際に作業をすることによって、団員がプランニング・マネジメントの能力を身につける。
- ③イベントにおいて、できるだけ多くの仮設住民さんに参加していただき、住民同士の交流・学生との世代間交流を通して、楽しいひと時を過ごしていただく。また、学生らは「まだ被災地のことを忘れていない」「被災者の皆さんのために何かしたい」という思いを行動として示し、仮設住民の方々に少しでも希望を感じていただけるようにする。
- ④学んだことと感じたことを皆で共有して、被災地支援活動の継続と新しい支援の方法について皆で考えていく。

研修の内容

今回の研修は、私たちが昨年12月の餅つき大会に関わらせていただいた、岩手県釜石市甲子仮設住宅にて実施した。内容は、学生が主体となってアイデアを出し、甲子仮設住宅自治会の方々や住民の皆様にも協力していただきながら、仮設住宅で「夏祭り」を実現するというもの。

「夏祭り」企画

企画・準備では、次のようなことを行った。

- ・ミーティングにて、イベントのコンセプトの決定
- ・グループごとに分かれて、内容のアイデア出し→全員で共有&具体化
- ・7月12日に団員2名で釜石を訪問し、自治会の方々と打ち合わせ
- ・イベントのスケジュール、必要な物品リスト作成
- ・夏祭りのための飾りや看板作り、射的の道具づくり
- ・イベントのチラシづくり
- ・釜石よいさ踊りの練習
- ・必要な物の買い出し
- ・住民の方々との合同合唱のための練習
- ・電話とメールを使っての自治会の方との連絡&相談
- ・当日の流れ確認や役割分担など

当日の流れ

8月3日12時30分頃、1年生が4人、2年生3人、3年生が4人の、計11人で仮設住宅を訪れた。まずは、仮設住宅の自治会の会長さんをはじめ、中心となって実施にご協力いただく自治会や住民の皆様にご挨拶をした。その後、手づくりした飾りで仮設住宅前の広場を飾り付けし、事前に役割分担しておいた担当ごと分かれて食事提供の準備を進めた。準備をあらかた終えたところで、私が簡単に学生の紹介と開会の挨拶をして、「夏祭り」開始。

14時過ぎから、流しそうめん、かき氷、たこやき、コーヒー、チョコレートフォンデュなどの食べものの提供と、手作りの射的ゲームの実施をした。イベントの後半には、住民「歌う会」の方々と学生の合同合唱、ゲストとして自治会の方々が呼んで下さった演奏家の大久保正人さんによる素敵な尺八の演奏があり、最後は浴衣に着替えた学生らによる釜石よいさ踊りが披露された。そして、学生が一人ずつ皆さんの前で感想を述べ、イベントは終了。

得られた成果

今回のイベントを通して、7人の後輩は初めて被災地を訪れた。彼女らは実際に現地を

訪れること、住民の方々との会話を通して、4年経った現状への理解をかなり進められたようだ。企画から実施まで自分たちで行ったことで、仮設住宅でのイベント開催に必要なことのすべてと、今の自分たちに足りないことを確実に学ぶことができた。メンバー同士助け合いながら1つのプロジェクトを成功させられたことで、自信やこれからに向けての気力も得ることができた。

イベント当日仮設住民からは約30名の参加があった。近隣の住民や、仮設住宅を前に出て行った方々、孤立しがちな一人暮らしの中年男性、さらには子供も数人来てくれた。最後には「またぜひ来てね」「ありがとう」とたくさんの方に声をかけていただき、皆さんに喜んでいただけたということを実感することができた。

考察

イベント全体を通しては、住民の方同士の会話、学生と共に行った作業、そして出し物などを通して、学生も住民も笑顔の絶えない1日となった。準備段階で多少大変なことがあっても、お年寄りの住民の方々は「わざわざ東京から来てご苦労さん。分からないなら教えてあげよう、手伝ってあげよう」というスタンス、学生側は「住民の皆さんに喜んでもらいたい、何とかして成功させたい」というスタンスであったため、互いに信頼し助け合えたのではないだろうかと感じている。

一方、反省点もたくさんある。今回最も上手くいかなかったこととして、メンバーの当日の流れの把握が甘かった点があげられる。当日の準備段階で、今自分が何をすればいいか、どう動けばいいか分からず、臨機応変に対応することもできていなかった後輩の姿が見受けられた。この部分においては、リーダーとしてもっと後輩のイベント全体理解への徹底をするべきであったと深く反省するところだ。また、企画の中心となって私自身が動きすぎてしまったため、皆に配分する仕事の量や内容について見直し、改善していく必要がある。特に現地の自治会の方との連絡は、連絡先がいくつかあっては先方にとって迷惑かと思い私のみがやっていたが、現地の考えや状況を理解する上では、私以外の団員が行うことも必要なのではないかと思った。

今後に向けて

自治会の事務局をしていらっしゃる男性と話をした。すると男性はこう言っていた。「震災当時の辛かったり悲しかったりした経験って、自分からは誰も話したがない。でも、実は誰かに伝えたいと思ってる人もいて、そういう人は聞かれたら話してくれるんだよね。だから、これからまた、学生が住民の話を聞く会なんてやってもいいんじゃないかな」。私はこの話を聞いて、4年経った被災地において学生ができることとして、“震災を記録や記憶に残す”“さらに多くの若い人に伝えることで、震災を風化させないようにする”という面において、新たな可能を感じた。

また、NPO法人 hands の菊池さんは、「甲子仮設は来年の夏までになくなってしまいうけ

れど、復興公営住宅ではまた新たにコミュニティを形成することや、仮設住宅でのコミュニティを維持していくが必要になってくる」と教えて下さった。私達は、仮設住宅が集約された後のことをより深く考え、阪神淡路大震災などの先例に学び、もっと被災地のことを理解していきながら、この活動に取り組んでいかなければならないのだと思う。

終わりに

今回の研修は、現代福祉学部国内研修奨励金給付制度で交通費を給付していただいたことで、現地に足を運び、様々な学びを得ることができた。制度を通して援助いただいた大学と現代福祉学部に、心から感謝したい。そして、現地に行って、見て、実行して、人と話したからこそ感じられた学びを、これからの活動に確実に活かしていきたい。

次の活動は、夏休み明けすぐから始める予定だ。ありがたいことに、ある企業から助成をしていただけることが決定したため、活動の可能性を広げていくことができる。私たちはこれからも、定期的にミーティングを行い、皆でアイデアを出し合いながら、「被災地のために自分たちにできること」を模索し実現するために尽力していく。